

平成 3 1 年度  
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業  
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)  
 成果報告書

団 体 名	特定非営利活動法人いわてアートサポートセンター	
施 設 名	宮古市民文化会館	
助 成 対 象 活 動 名	人材養成事業・普及啓発事業	
内定額(総額)	4,379	(千円)
公 演 事 業	0	(千円)
人材養成事業	1,451	(千円)
普及啓発事業	2,928	(千円)



(2) 平成31年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	みやこジュニア・カンパニー事業	4月～3月	講師：八木絵里、宮坂拓志、竹原奈津、齋藤彩、齊藤弦、木戸口夏海、村野井友菜ほか	目標値	100
		宮古市民文化会館		実績値	入場者：196人 参加者数：延べ434人
2	ゼロからはじめる中高生のための演劇シリーズ	7月～1月	講師：穴迫信一	目標値	1000
		宮古市民文化会館ほか		実績値	入場者：1245人 参加者数：延べ64人
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

(3) 平成31年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	ARTS for ALL U18	7月～2月	講師：中村蓉、森下真樹、北尾亘、穴迫信一ほか	目標値	300
		宮古市民文化会館ほか		実績値	入場者：2359人 参加者数：280人
2	宮古クリエイティブシェア事業	8月～2月	講師：泉秀樹、中村蓉	目標値	100
		崎山貝塚縄文の森ミュージアムほか		実績値	60
3	復興コミュニティシアター事業「みやこ市民劇」	4月～2月	演目：みやこ市民劇第二回公演「鍛ヶ崎エレジー 激闘！宮古港海戦」	目標値	入場者数：1500人 参加者：100名
		宮古市民文化会館ほか		実績値	入場者数：1526人 参加者数：のべ2498人
4	芸能 Re:Connect	3月	出演：田代大念仏剣舞、川内鹿踊、津軽石さんさ、南川目さんさ、葛巻神楽	目標値	400
		宮古市民文化会館		実績値	-
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

## 2. 自己評価

### (1) 妥当性

自己評価
<p data-bbox="129 309 1481 387">社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p> <p data-bbox="129 454 1481 629">宮古市民文化会館は岩手県中部沿岸（宮古・下閉伊地域）の芸術文化振興の中核となる文化施設である。東日本大震災で被災、大規模改修を経て平成 26 年 12 月に再開館した。文化会館は宮古市文化会館設置条例に加え、震災からの復興という地域の特性を踏まえた宮古市総合計画ならびに震災の文化復興に関する提言書等を踏まえた 8 つの社会的ミッションを設定し運営している。</p> <p data-bbox="156 645 1145 678">令和元年度は平成 30 年度に引き続き、4 つの項目をリンクさせた事業を実施した。</p> <ul data-bbox="172 696 1481 1014" style="list-style-type: none"><li>(1) 芸術文化による次世代育成を推進する事業として、本市及び近隣地域の中学校・高等学校に1校も演劇部がないことを受けた人材育成事業</li><li>(2) 鑑賞と発表の場から地域の芸術文化創造と発信を行う場としての役割を行う作品創造事業</li><li>(3) 文化会館から周辺地域及び教育や福祉施設などに表現を広げ地域の芸術文化の許容力を深める役割として、幼児教育・初等中等教育を対象としたアウトリーチ事業</li><li>(4) 他地域や芸術文化以外のジャンルなどの芸術文化の交流を深め地域力を強化する役割としてジオパークと連携及び東日本大震災で被災した地域資源を復活させる普及事業</li></ul> <p data-bbox="156 1032 544 1066">以上を計画し予定通り実施した。</p>
<p data-bbox="129 1223 975 1256">助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p data-bbox="129 1323 1481 1498">宮古市総合計画のまちづくり基本方針の中で「豊かな自然や伝統芸能など地域の多様な資源を守り活用する『創造』のまちづくり」が掲げられたことを受け、三陸ジオパーク等の自然景観の活用が社会的・文化的・経済的な視点から重要視されている。本館ではジオパークの資源を活用した教育普及として昨年度から継続したプロジェクトを行っており、開発したプログラムを始めて小学生へ向けて実施し好評を得た。</p> <p data-bbox="129 1516 1481 1691">また総合計画において「あらゆる分野において定住促進の視点を入れた取り組み」が求められており、本館では定住促進につなげるべく、コミュニティ形成事業を行なっている。特に今年度はみやこ市民劇の開催により小学 1 年生～70 代までの様々な市民との交流を生み出すことができ、「集う劇場」のほか「新たな居場所作り」の一助となった。</p>

## (2) 有効性

### 自己評価

目標を達成したか。

#### <人材育成事業>

宮古市の課題として実演芸術の担い手の高齢化があげられる。また舞台芸術に触れる機会も都市部に比べて極端に少ないため、小学生から高校生を対象に「鑑賞」、「体験」、「創作」の事業を実施した。

特にゼロからはじめる中高生のための演劇シリーズでは、昨年度主に高校生を対象としたことから、今年度は中学生に焦点を当て実施した。「鑑賞」では市内の全中学生を劇場に招き、現代演劇を鑑賞する唯一の機会となった。「体験」では中学校でのアウトリーチを実施した。実施前の演劇に対する期待値が63.3%だったことに対し、実施後の満足度は95%を超え、中学生の舞台芸術への関心を高めたほか、担任の先生方からも生徒の意外な一面を見ることができたと大変好評であった。「創造」においては参加した全員が同様のプログラムに参加したいと回答したことから、昨年度以上に有効的な事業になったと考えられる。

#### <普及啓発事業>

本事業では①ダンスや演劇等への参加度を高めることを目標にした18歳以下の児童・生徒へのプログラム、②地域の活性化を目標に地域資源を活用したプログラム、③新しいコミュニティづくりを目標にした市民参加プログラム、④郷土芸能の継承と国際化の推進を目標とした芸能プログラムを実施した。

- ① ARTS for ALL U18 ではアウトリーチ回数や参加者が昨年度よりも増え、少しずつアウトリーチの需要が増えてきたと言える。特に演劇アウトリーチの実施後のアンケートでは、満足度が96%を超え、同様の授業を受けたいと答えた児童が92%を超えた。ダンスアウトリーチについてもほぼ同様であり、どちらも66%以上の児童・生徒がダンスや演劇を好きになったと回答した。
- ② 宮古クリエイティブシェア事業では協働団体が増え、より地域資源の芸術的活用の理解を深めたと言える。昨年度から継続したプログラムを実施したダンス借景事業では、前年度開発したプログラムを①の事業内で実施し、地域資源と舞台芸術の双方に興味を深めることができた。また、失われた伝統芸能の復活を試みたプロジェクトでは市民のリサーチを基に踊りを復興し、市民に振り付けを行い、その成果を③新しいコミュニティづくり「みやこ市民劇」の中で発表することができた。
- ③ 復興コミュニティ事業みやこ市民劇は、平成29年度に第1回公演を開催後、今年度が2回目の開催となった。観客数では前を下回ったが、参加者は11.4%増えた。参加者を対象にしたアンケートでは81.6%が次回の市民劇に参加したいと回答し、「人・心・未来と過去をつなぐ市民劇に期待している」とコメントを寄せられ、コミュニティ形成の大きな要因になったと言える。
- ④ 芸能 Re:Connect は新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となった。

以上より普及啓発事業について中止となった④以外の事業は各種目標を達成し、有効であったと言える。

### (3) 効率性

#### 自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

各事業について共通して検討するにあたり、本市の地域性について考察を図りたい。本市は本州最東端に位置し、東京駅を起点とした場合の片道の移動時間は5時間以上を必要とする。また、本市は県内で最も広い面積となっており、本施設が事業でカバーする圏域は神奈川県面積に匹敵することから移動だけで数時間を要する。アーティストが首都圏で行うワークショップを本市で行う場合、最低移動時間が10時間以上、拘束日数が2日間必要になり、アーティストの体力ほか、移動による拘束時間の長さとしても負担が大きい。また、首都圏と謝金額が同じであったとしても4倍の拘束時間となる。

このことを踏まえ前年度同様、短期のアーティスト・イン・レジデンスを行い、複数の事業を滞在期間中に実施するスタイルをとった。これにより事業を個別に実施する場合に比べ、交通費にかかる経費等を節減することが可能となった。また、普及事業全体の事業費（芸能 Re:Connect を除く）を約15%節約しながら、当初予定していた回数のアウトリーチを実施することができた。

実施時期についても、鑑賞事業については各関係機関との協議により適切に実施することができたほか、アウトリーチ等に関しても実施先や対象者が参加しやすい時間設定にするなど、実演芸術が日常に浸透していくことを目指し実施した。

以上のことからアウトプットに対して、実施期間・事業費は適切だったと考える。

## (4) 創造性

### 自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

本館は築年数が 40 年を超え、岩手県沿岸の文化会館として最も古い施設の一つとなる。また施設を利用する文化団体も高齢化が進み、利用者の高齢化が進むとともに、幅広い世代の市民が文化芸術や付随する価値等を享受する機会が乏しい状態である。そのような背景の中、地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮するために、本事業の中で主に 2 つのアプローチを行なった。

#### ① 創造的な市民のつどいの場づくり

市民劇を通じて創造的な集いの場を設けることができた。6 ヶ月におよぶ演劇づくりに携わる市民数は参加者 204 人、鑑賞者を含めると 1730 人が集った。これは全市民の 3.3% に当たる。また参加者の 81.6%、鑑賞者の 27.8% が、次回の市民劇に参加したいと回答し、継続的な創造的な場づくりにつながったと考えられる。またこれからの実演芸術化の人材育成事業を主軸に、長期にわたって会館に集うことのできる機会を設け、新たな文化芸術の担い手作りに取り組むことができた。

#### ② 本市の政策等を踏まえた施設外での事業

文化芸術そのものの推進のみならず、多様な行政領域とリンクさせるプロジェクトを立ち上げ、施設外で事業展開をスタートさせた。縄文ミュージアムでのプログラムは、市内のジオパークポイントへの学習意欲を高めることを目的にし、これまでにはない創造的な取り組みであったと考える。また縄文ミュージアムの職員がダンスに取り組んだことから、新たなダンスの担い手の創出につながった。かつて宮古芸者の 13 番であった「大漁踊り」の復活は、今後の観光産業の活性化も期待されるものとなった。事業の文化芸術としてのアウトカムのみならず、都市政策への波及効果を踏まえた創造的な事業となった。

こうした考え方に基づく劇場事業はまだ近隣の市町村ではあまり取り組まれていない。これまで被災地域での文化芸術に関する政策提言を行ってきた運営母体を持つ施設としての機能を活かした取り組みであったと考える。



## 自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

地域の実演芸術の振興及び文化芸術の発展について、下記の3点で発展につながったと考える。

### ① 市民の演劇活動の活性化

岩手県はおおよそその地域で市民劇が行われている。しかし、演劇文化の乏しい当地方は2018年度に初めて市民劇を行なった。2年に一回の隔年開催とし、本年度は第2回目の公演となった。参加人数で見ると、前回169名の参加者であったのに対し、本年度は203名の参加者数となり34名の増加となった。また、市民劇の中核団体として運営に携わったみやこ市民劇ファクトリーにも加盟人数もが増え、年間で活動する市民の数が増えた。これは通年で行う演劇活動が促進されたと言える。

### ② 現代の実演芸術の普及

実演芸術の普及としてダンスの実施回数を増やし、前年度よりコンテンポラリーダンスを体験する児童・生徒数が19名増えた。また小学生に向けた演劇のアウトリーチは今年度初めて実施し、新たに114名の児童が演劇を体験することができた。

小学校の義務教育の中で実演芸術の体験ができ、教育の中にダンスや演劇を普及することができた。

### ③ 地域文化の復興

東日本大震災で失われた伝統舞踊の復活を目指すプロジェクトを行なった。かつて東北有数の港町であった宮古市・鍬ヶ崎地区の舞踊『大漁踊り』は、鍬ヶ崎芸妓の18番であり、座敷のほか、船出や祭りの度に踊られ港町の賑わいと活気の特徴であった。昭和40年代後継者不足により踊り継ぐ芸妓がいなくなってしまうことで潰えた。東日本大震災の被災により踊られた料亭なども流されてしまった。本事業で舞踊を復活させ、担い手としてみやこ市民劇ファクトリーが踊りつぐこととなった。

また本市では戊辰戦争の一つであった宮古港海戦150周年記念とし、様々なイベントが行われたことに伴い、本館でも先述した鍬ヶ崎地区を題材にした小説「鍬ヶ崎心中」を元にした市民劇を行なった。このことにより、広く地域の人々が地域の歴史について関心を示すきっかけとなった。

その他、商店街をフィールドとして演劇合宿を行なった。実際に営み・暮らしている方からのヒアリングを実施する他、商店街を舞台とした上演を通じて商店街での文化活動を振興することができた。

## (5) 持続性

### 自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

1. 事業の持続性・発展性を促すことを目的に下記の通り、事業 PDCA サイクルを設け、職員や地域の関係者のコミットメントを高めるための事業運営を行うことで、組織活動が持続的に発展したと考える。

<持続的な発展を目指した PDCA サイクルの導入>

P：事業企画はプロデューサー（専門人材）と事業スタッフによって計画し、運営は事業に応じて市内の団体（教育機関・社会教育施設等）と連携し単館だけではできない持続可能な活動とした。

D：実施にあたり本館の技術職員を創作などにおけるテクニカルプランナーとして携わることにより、こども劇団（ジュニアカンパニー事業）でのプラン製作や貸館等の利用者の希望にできるかぎり答えることができた。また、事業職員も制作業務に加えていくつの技術業務に対応できるように改善していった。

C：事業の実施後は月一回の企画経営会議にて事業のアウトプットについて報告を行い内部で検証を行なっている。また年2回の運営協議会にて事業を報告し、評価を行なった。

A：企画経営会議・運営協議会での検証や評価結果を踏まえ、事業区分ごとのロジックモデルにて自己点検し、次年度以降の改善を行なった。

2. 個別の事業実施においては、パートナーとなる新たな市民グループの設置や、地域団体との連携を促進し、文化芸術の新たな担い手づくりを行うことで持続性をもった事業の発展を促す運営を行っている。

<文化芸術の新たな担い手>

みやこ市民劇では、市民劇の製作パートナーとして市民によって構成される「みやこ市民劇ファクトリー」を設けている。メンバーは第一回公演の参加者を中心に結成される。「みやこ市民劇ファクトリー」の設置によって、第一回市民劇は会館スタッフが担っていた役割について、第二回では創作のノウハウを市民に提供し、多くのスタッフワークを市民が主体的に行うことができた。地域の文化を支える人材育成的な面を持ち合わせた本事業として、継続的な発展が認められた。

<地域の団体との連携>

事業ごとに多様な団体と連携することで持続性と発展性を担保している。2年目となる縄文ミュージアムとの連携は全職員が踊りの担い手になど積極的な参加があった。また新たにスタートした商店街での演劇合宿は、商店街と連携することで新しい地域素材の発見があったほか、劇場にとらわれない演劇公演のあり方や魅力の発信が可能なことを商店街等とも共有することができた点から、次年度以降の持続的な発展が認められた。